

ああ、またか。そんな怒りを感ずるのは私だけではないだろう。「もうおねがい、ゆるしてゆるしてください」という痛ましい文章を残して逝った船戸結愛ちゃん(5)虐待死事件そのものではなく、その新聞報道に對して、である。〈悲痛な心の叫びを忘れまい〉(読売)〈SOS届かず〉(毎日)〈悲劇は繰り返されてきた〉(産経)：と新聞各紙には、いつもの「嘆き記事が並んだ」。

ウサギ飼育用のカゴに監禁されて死亡し、遺体を川に流された3歳男児の東京都足立区・うさぎヶーシ虐待死事件(平成27年発覚)のときも、山中から男児(3)の白骨死体が見つかった大阪府堺市・虐待死事件(28年発見)のときも、同様の記事が

新聞に喝!

並んだものである。虐待死事件のたびに、新聞は同じ論調を掲げ、識者のコメントを紹介し、事件を「嘆いてみせる」のだ。

血の繋がりが無い33歳の父親に結愛ちゃんがどれほど虐待を受けていたかは、最初の一時保護、そして2度にわたる父親の傷害容疑の書類送検、その後の病院による児童相談所への通告(痣の発見)でも明らかだった。それでも東京に引っ越した一家に、品川児童相談所は及び腰で、家庭訪問した際、母親に「関わらないでください」と言われると退散し、警察への情報共有も怠り、最悪の事態を迎えたのだ。

私は、同様の事件はこれからも起り続けると思っている。なぜなら「児相の職員を増やせ」「専門性のある職員をもっと」と

作家・ジャーナリスト 門田隆将

虐待死事件と「嘆き記事」

と、同じ意見が「いつものように」叫ばれるだけだからだ。

新聞はなぜ問題の本質を突かないのだろうか。それは、「もはや児相には期待できない」ということだ。児童虐待防止法には、児相による自宅立ち入り調査も認められており、その際、警察の援助を求めることもできるようになってきている。だが、児相はそれを活用しない。なぜか。

それは職員の能力と意欲の問題であり、一方で「プライバシー侵害」やら「親の権利」を振りがさず「人権の壁」への恐れがあるからだ。子供を虐待死させるような親は、人権を盾に抵抗し、あらゆる言辞を弄して子供への面会を拒む。この壁を突破して子供の命を守るには、逆に、児相に「案件を抱え込ませてはならない」のである。

警察を含む行政組織が全情報を共有し、例えば「街の灯台」たる交番のお巡りさんが、絶えず訪問して子供の顔を確認するようなシステムを構築しなければならぬ。

しかし現実には、児相や厚生省は職員の増員を求めるのに必死で、虐待情報の共有に否定的だ。彼らにとっては、自らの権限拡大の方が大切なのだ。こうしたお役人の言い分に目を眩まされているのが、小池百合子都知事であり、安倍晋三首相にはかならない。新聞はなぜここを突かないのか。どれほど犠牲者が出ようと他人事のような「嘆き記事」をいつまでも読まされ続けるのはご免こうむりたい。

◇
〈かどた・りゅうしょう〉昭和33年高知県出身。中央大卒。作家・ジャーナリスト。最新刊は、『敗れても敗れても 東大野球部「百年」の奮戦』。